

# 適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** のみで、6 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立大泉高等学校附属中学校

問題は次のページからです。

# 1 次の「文章1」と「文章2」を読み、あとの問題に答えなさい。

(\*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。)

## 文章1

中国を最近、訪問した。中国の人たちと話し合っていて、孔子の教えが今も生きていることが感じられた。それについても思い出したのは、桑原武夫先生の『論語』である。桑原先生の名解説で、『論語』が「孔子とその一門とのいきいきとした言行録」として捉えられ、いわゆる道学者としてではなく、人間、孔子の姿を生き生きと浮かびあがらせてくる書物であることが示される。

いろいろ好きな言葉があるが、ここに掲げたのは、雍也第六二十の「子曰く、之れを知る者は之れを好む者に如かず、之れを好む者は之れを楽しむ者に如かず」の後半である。ここには、知る、好む、楽しむ、という三つの動詞があげられており、その重みが異なることを端的に示している。

最近は情報化社会という表現がもてはやされて、誰もが新しい情報を得るだけ多く、そして早くキャッチすることに力をつくしている。確かに「知る」ことは大切だ。しかし、そのことに心を使いすぎると、それに疲れてしまったり、情報量の多さに押し潰されてしまったり、それに主体的にかかわっていく力がなくなってしまう。

「好む」者は、つまり「やる気」をもっているもので、積極性がある。情報は与えられてくるので、人を受動的にする。人間の個性というも

のは、何が好きかというその人の積極的な姿勢のなかに現れやすい。<sup>\*</sup>私はカウンセリングのときに、何か好きなものがあるかを問うことがよくある。好きなことを中心に、その人の個性が開花してくる。

孔子は、「好む」の上に「楽しむ」があるという。これはなかなか味わいのある言葉である。桑原先生の解説によれば、『楽』は客体の中に入ってあるいはそれと一体化して安住することであろう。最初の二つの段階を経て、第三段階の安らぎの理想像に達するとする」ということになる。

「好む」は積極的だが、下手をすると気負いすぎになる。それは「近所迷惑」を引き起こすことさえある。「楽しむ」はそれを超え、あくまで積極性を失ってはいないが安らぎがある。これはまさに「理想像」である。これを提示するのに、「知」、「好」の段階を置いたところに孔子の知恵が感じられる。

(河合隼雄『「出会い」の不思議』による)

〔注〕

孔子<sup>こうし</sup>——古代中国の思想家。

桑原武夫<sup>くわばらたけお</sup>先生の『論語<sup>ろんご</sup>』——フランス文学者である桑原武夫氏による『論語』の解説書。

『論語』——中国の古典。

言行録——言ったことや行<sup>おこな</sup>ったことを書き記したものを。

道学者——道徳を説く人。

雍也<sup>ようや</sup>第六二十——『論語』の章の一つ。

「子曰<sup>いわ</sup>く、之<sup>こ</sup>れを知る者は

之<sup>し</sup>れを好む者に如かず、

之<sup>し</sup>れを好む者は

之<sup>し</sup>れを楽しむ者に如かず」——孔子が言う、知るということだけ

では、まだ、これを愛好することに

及<sup>およ</sup>ばない。愛好するということは、

これを楽しむことには及ばない。

端的<sup>たんでき</sup>——遠回しでなく、はっきりと表すさま。

私<sup>わたし</sup>はカウンセリングのときに——筆者はカウンセリングを仕事と

している。

客体——はたらきかけるさいの、目的と

なるもの。対象。

## 文章2

以前からあこがれのあった小鼓を京都で習ってみる事になった。た筆者は、着物をきちんと着付けてもらい、緊張しながらお稽古の場にのぞんだ。

いよいよ部屋を移動して小鼓に触ってみる事になった。

「まずは簡単に小鼓について説明します。鼓は馬の皮でできておりまして、表と裏があります。桜の木でできた胴という部分があり、麻の紐を縦と横に組み合わせただけの打楽器です」

目の前に小鼓を置いていただくと、「本物だあ」という無邪気な感動があった。

「構えると打撃面が見えないというのが、小鼓の特徴です」

打撃面が見えない、というのがどういふことなのか咄嗟には理解できないまま頭の中で必死にメモをとる。

「まずは固定観念なしでいっぺん打っていただきます」

とはいえ、どう持っていていいのかもわからない。手をこうやって、親指はこの形にして、くるりとまわして、と言われるままにおそろおそろ小鼓を持ち上げて、右肩に掲げた。

「イメージ通りに打ってみてください」

勢いよく腕を振って、小鼓を手のひらでばしりと叩いた。テレビなどでよく見る映像の真似っこだ。イメージと勢いに反して、ぺん、という間抜けな音が出た。

「いろいろやってみてください」

何度打っても、ぺん、ぽん、という、机を叩いているような間抜けな音しか出ない。

打撃面が見えない、という意味が打ってみてわかった。自分の手のひらがどんな動きをしているのか、鼓のどの辺を打っているのか自分ではわからないのだ。

「案外、鳴らないものでしょう」

先生の言葉に、「はい」としみじみ頷いた。

じゃあ、と、先生が姿勢と持ち方を正してくださいました。

「手をぶらぶらにして」

言われた通りに手首から力を抜く。先生が腕をもって一緒に打ってくださいました。

ぽん！ ぽん！

さっきとは比べ物にならない大きな音が出て驚いた。周りの空気がぶるぶる震える感じがする。騒音の振動とはまったく違う、部屋の空気がびりりと引き締まるような震えた。

「鼓はいかに力を抜くことができるかということが大事です。鼓は、実はこの打った面ではなく、こっちの後ろから音が出ていきます。ちよっと私の言うことを聞いていただくと、すぐ鳴るんです」

本当にその通りで、魔法みたいだったので、感動して何度も「はい！」と頷いた。

「息を吸ったり吐いたりすると、もっという音が出ます。吸う、ぽん」

息を吸い込んで打つと、ぼん、という音ももっと大きくなった。

「村田さんらしい鼓の音というのが必ずあって、同じ道具を打つても人によって違う音が出ます。ここにいらっしゃる方がそれぞれ手に取つたら、それぞれ違う音が出ます」

上手な人はみんな完璧な音を打っていて、それは同じ音色なのだろうと勝手に想像していたので、驚くと同時に、自分らしい音とはどんな音なのか、と胸が高鳴った。

「今、村田さんが打った鼓を、何もすることなしに私が打ってみます」  
先生が打つと、美しい響きに、部屋の空気がびりびりと気持ちよく震えた。凜とした振動に呼応して、部屋の空気が変化して一つの世界として完成された感覚があった。

「鼓には五種類の音があります」  
説明をしながら先生が鼓を打つ。さっきまで自分が触っていた鼓から、魔法のように複雑に、いろいろな音が飛び出す。

「今日みたいに湿気がある日は、小鼓にとってはとってもいい日なんです」

たまたま来た日がよく音が出る日だという偶然が、なんだか自分が小鼓と縁があったみたいでうれしくなった。

今度は掛け声をかけて鼓を打ってみた。

「掛け声も音の一つです」

少し恥ずかしかったが、自分の身体も楽器の一つだと思つと、少し勇気が出た。先生の謡に合わせて、

「よー」

と掛け声を出し、ぼん、と打った。もっと大きく響かせたいと思つても、なかなかお腹から力が出なかった。声に気をとられて、鼓の音もまた間抜けになってしまった。

「音が出ないのも楽しさの一つです。少しのアドバイスで音が鳴るようになります、素直な人ほどぼんと鳴ります」

先生の言葉に、とにかく素直に！ とすっかり心に刻み付けた。

「村田さんが来てくれて一番の喜びは、これで鼓を触ったことがない人が一人減ったということです。日本の楽器なのに、ドレミは知っていても小鼓のことはわからないという人が多い。鼓を触ったことのない人が減っていくというのが、自分の欲というか野望です」

先生の中にごく自然に宿っている言葉が、何気なくこちらに渡されてくる。先生の言葉も、鼓と同じように、生徒によって違う音で鳴るのだらうと感じた。

「お能の世界は非日常の世界なのですけれど、やはり日常に全て通じているんです」

最後にもう一度、鼓を構えて音を鳴らした。

とにかく素直に、素直に、と自分に言い聞かせて、身体の全部を先生の言葉に任せるような感覚で、全身から力を抜いた。

ぼん！

今日、自分ひとりで出した中で一番の大きな音が、鼓からぼんと飛んでいった。

「とても素直な音ですね」

先生の言葉にうれしくなってしまう、もっと鳴らそうと思うと、<sup>①</sup>今度は変な音が出た。

「今度はちょっと欲張ってききましたね」

音でなんでもわかっってしまうのだなと恥ずかしくなった。

「ありがとうございました」

お稽古の最後に、敬意を込めて先生に深く頭を下げた。お礼の言葉は日常でも使っているが、先生に向かって、「学ばせてくださってありがとうございました」という気持ちを含めて発するその言葉は、普段とは意味合いが違っていた。

その夜はずっと鼓のことを考えていた。ぼーんと気持ちよく鳴った音だけではなく、先生の言葉に込められた「日本らしさ」ということ。鼓を触ったことのない人間が、今日一人減って、それが私だということ。短い時間だったけれど、私の中に何かが宿った気がした。思った以上に忘れられない経験として、自分の中に刻まれていた。

鼓から飛んでいった私だけの「音」の感覚が、今も身体に残っている。ぼーん、と響いた、私だけの音。あの音にもう一度会いたいと、東京に戻った今も、たまに手首をぶらぶらさせながら想い続けている。

(村田沙耶香「となりの脳世界」による)

〔注〕

小鼓——日本の伝統的な打楽器の一つ。(図1)



図1

謡——日本の古典的芸能の一つである能楽の歌詞をうたうこと。

お能——能楽。室町時代に完成した。

〔問題1〕 個性とありますが、これは、**文章2** ではどのような形で表れていますか。会話文以外の部分から、五字以上十字以内でぬき出しなさい。

〔問題2〕 ① 今度は変な音が出た。とありますが、それはなぜですか。十五字以上二十字以内で説明しなさい。ただし、**文章1** の表現も用いること。

〔問題3〕 **文章2** のお稽古の場面では、**文章1** の「知る、好む、楽しむ」のどの段階まで表されていると言えるでしょうか。あなたの考えを四百字以上四百四十文字以内で書きなさい。ただし、次の条件と下の「きまり」にしたがうこと。

条件 次の三段落構成にまとめて書くこと

① 第一段落では、「知る」、「好む」、「楽しむ」のどの段階まで表されていると考えるか、自分の意見を明確に示す。

② 第二段落では、「①」の根拠となる箇所を **文章2** から具体的に示し、**文章1** と関係付けて説明する。

③ 第三段落では、「①」で示したものはちがう段階だと考える人にも分かってもらえるよう、その人の考え方を想像してそれにふれながら、あなたの考えを筋道立てて説明する。

〔きまり〕

- 題名は書きません。
- 最初の行から書き始めます。
- 各段落の最初の字は一字下げて書きます。
- 行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。
- 、や・や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じように書きます（ますめの下に書いてもかまいません）。
- 。と」が続く場合には、同じますめに書いてもかまいません。この場合、「。」で一字と数えます。
- 段落をかえたときの残りのますめは、字数として数えます。
- 最後の段落の残りのますめは、字数として数えません。